

# 地域リハビリテーション支援センターだより

(神奈川県リハビリテーション支援センター)

平成28年11月発行 NO-57

地域リハ支援センター

## 高次脳機能障害セミナー 理解編

当事者が綴った言葉が心に響く！！

“「当たり前」それが意外と有り難い”



(講演中の様子)

平成28年8月27日(土)に神奈川県総合医療会館にて、高次脳機能障害セミナー理解編を開催しました。本年度は「高次脳機能障害と向き合う～長期支援の中で～」をテーマ講演を開催しました。医師からは「医学的な長期経過や対応方法の概論について」、作業療法士からは「入院中のリハビリから退院後の社会生活に向けた準備について」、「らっく」の鈴木氏からは「生活課題や精神障害の方との共通課題、通所施設の取り組み内容について」、臨床心理士からは「通院プログラ

ム(外来のグループ訓練)等から通所や就労に向けた準備について」、コーディネーターからは「事業概要や社会参加までの長期支援の例示、制度活用について」、それぞれの立場から講演がありました。

セミナーは160名程の方にご参加いただき、質疑応答では、就労支援、個別支援等についての質問があり、急遽、当事者の方にも参加をしていただきました。当事者の方からは「『当たり前』それが意外と有難い」と、当事者の視点からの貴重な話を聞く機会になりました。

高次脳機能障害の支援拠点機関は全国に設置され、コーディネーターも配置されていますが、会場にはコーディネーターの存在を初めて知った方が多く、まだまだ普及活動が大事だと改めて考えさせられました。長期支援の中では、当事者・家族双方に様々な変化があることを支援者が理解し、医学的リハや社会的リハなどのステージを意識して支援することが大切になります。今後も医療・障害・介護・就労の関係機関との連携を重ね、高次脳機能障害の支援がより発展できるように努力していきたいと考えています。

(佐藤 健太)



(当事者が綴った言葉)

【講師】 神奈川リハ病院 医師 青木重陽 / 作業療法士 廣田祐樹 / 臨床心理士 殿村暁 /  
ソーシャルワーカー 佐藤健太  
社会福祉法人「らっく」 理事長 鈴木純恵氏

今年度の新企画研修！！

# 視覚障害のある方への支援 五感を使った体験盛り沢山！



(アイマスクでの食事体験の様子)

9月13日(火)、神奈川リハビリテーション病院(以下、神奈リハ)にて、「視覚障害のある方への支援」を開催しました。本研修会は、七沢自立支援ホーム視覚障害部門(以下、自立支援ホーム)が、医療職を対象に毎年実施してきたセミナーを基にしています。本年度から地域リハ支援センターの研修とし、対象者の職種や内容を拡大しました。対象者は医療職以外に福祉職や介護職にまで拡大し、内容は医学的な講義、視覚障害リハビリテーションの訓練紹介を新たに設け、今回は定員を上回る参加がありました。

午前は講義中心で、神奈リハ眼科医より、見える仕組みや視覚障害に関する医学的な知識、神奈リハ眼科で実践している特殊な専門外来(ロービジョンクリニック)等について、自立支援ホームの支援員からは、視覚障害リハビリテーション、視覚障害者の社会資源等についてお話をしました。

午後はアイマスクでの体験実習を中心に行い、情報障害者である視覚障害者に対して、簡潔に説明する必要性を体験して頂きました。まずは食事をする体験、次に、歩行誘導体験とシミュレーションゴーグルでのロービジョン(弱視)疑似体験を行いました。ロービジョン疑似体験では、読み書きにおける工夫や便利グッズの有効性を説明しました。参加者からは、食事体験中「情報がない中で食べても全くおいしくないし、楽しくない」等の声が聞かれ、誘導法体験では、最初は「怖い」という声が多くあがっていましたが、適切な支援のしかたに慣れるにつれて、皆さんの動きがスムーズになりました。

実習後は、福祉棟に移動して自立支援ホームの訓練を紹介し、各訓練室(歩行・日常生活・点字・パソコン・感覚)を順番に回って頂き、視覚障害者が実際にどのような訓練を受けているのかを説明しました。

十分な時間を取れませんでしたので、参加者からは、「訓練のことをもっと詳しく知りたい」等の声があがっていました。今後も研修内容を充実させていきたいと考えています。

(七沢自立支援ホーム 内野大介)

【講師】神奈川リハ病院 眼科医師 久保 寛之

七沢自立支援ホーム 矢部 健三, 角石 咲子, 内野 大介, 加藤 正志, 佐藤 伸行

## ◆今後の研修の開催予定

研修名		開催日	開催場所
脊髄損傷のリハビリテーション	実務編	11月26日(土)	神奈川リハ病院
排泄ケアの知識と実践		11月30日(水)	神奈川リハ病院
高次脳機能障害セミナー	実務編	12月10日(土)	厚木シティプラザ
知的障害の方の身体機能低下への対応		12月6日(火) 13日(火)	神奈川リハ病院
高次脳機能障害セミナー	就労支援編	H29年1月28日(土)	フォーラム246

## リハ専門相談 事例紹介シリーズ③「車椅子」

# 「楽に座ること」それは、生活を豊かにすること

### 「楽に座ること」の大切さ

健康な人の1日の生活を振り返ってみると、座って過ごす時間が意外に多いことに気付くと思います。健康な方は辛くなれば無意識で姿勢を変えています。自分では姿勢を変えられず辛い思いをされている車椅子利用者は多いのではないのでしょうか。姿勢の崩れは、息苦しさや食欲低下、痛みや疲れやすさの原因となり、社会的な参加や活動の妨げになります。



(元気になったAさん)

### 寝たきりから、ライフ活動へ

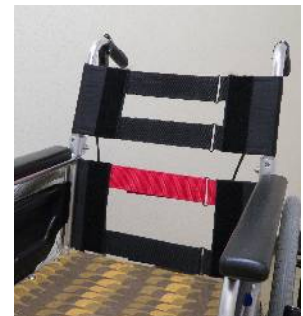
20代のアテトーゼ型の脳性麻痺のAさんは肺炎となり6カ月余りの入院生活の間に、すっかり体力が衰えてしまいました。気管切開や胃瘻、点滴が必要な状態で往診医、訪問看護ステーションのサポート体制を整え、自宅に退院となりました。退院3か月後には口からも食べれるまでに回復したのですが、今まで乗っていた簡易電動車椅子や座位保持椅子に座ることができず、寝て過ごしていました。新しく車椅子を作るために助言が欲しいという行政からの依頼でSWとPTが自宅に訪問しました。身体評価を行うと体が横に倒れてしまうこと、お尻や背中が痛むことなどの問題はありましたが、元の車椅子にまた座れそうなパワーを本人から感じました。そこで、自費でマルチクライニング車椅子を借りて、楽に座って生活することで体力

を回復する計画を立てました。PTが座りやすいように車椅子の調整を行い、退院4か月半後には元の車椅子にも乗れるようになり、8か月後には音楽ライブの演奏にも参加するまで元気になりました。

### 合わない車椅子の原因

現在、さまざまな高機能な車椅子が商品化されており、車椅子を使う方にとっては嬉しい状況になっていますが、楽に座れずに困っている人はいらっしゃいます。車椅子のサイズが体に合っていないという方は以前に比べ減っているようですが、楽に座るための調整が不十分であることがあります。バックサポートが姿勢に合わせての張り調整できることが知られていないとはその代表例です。円背の方が乗っているピーンと張った背もたれは実は調整できるかもしれません。

使う人に合った車椅子を選んだり調整することを、「車椅子シーティング」と言います。地域リハビリテーション支援センターではより良い「車椅子シーティング」ができる人が一人でも多くなるように研修も開催しております。



(バックサポート張り調整)

(平田 学)

4～10月	相談件数	訪問件数	来所件数
神経・筋疾患	18	9	4
脊髄損傷	9	0	6
脊髄疾患	12	6	3
骨関節疾患	8	3	0
脳性麻痺	24	13	10
脳血管障害	13	8	1
後天性脳損傷(CVA以外)	5	0	1
内部疾患	3	1	0
知的障害	8	4	0
その他(加齢・切断等)	3	0	1
合計	103	44	26

訪問・来所の目的	訪問件数	来所件数
補装具福祉機器	18	9
住環境整備	11	3
身体機能評価	5	0
ADL指導	1	0
訓練プログラム指導	3	0
介護指導	5	0
支援検討 他	1	11
補装具判定等	0	3
合計	44	26

## ◆参加報告◆

# 日本脳外傷友の会 全国大会 in高知

日本脳外傷友の会全国大会 in 高知では、全国支援コーディネーター研修会・交流会(10/7)、全国大会(開会式・当事者奨励賞授与・ガイダンス講演・基調講演・シンポジウム・アピール文採択 10/8)が行われました。

北岡氏の基調講演では「昨年の厚労省社会保障審議会にて障害者総合支援法改正を議論する中で、高次脳機能障害支援に関して、現在就労支援等は充実しているが、重度や社会的行動障害を抱える高次脳機能障害者が利用できるサービスがないこと(施設側のマンパワー不足等)旨のお話がありました。H17年に支援法が成立して今年法改正がされた発達障害に比較して、高次脳機能障害支援は遅れており、高次脳機能障害者支援関連法の制定が望まれるのではないか」との提言がなされました。

山田規敏子医師(当事者)と橋本圭司医師の対談では、山田氏の障害当事者としての主観的な体験を、橋本医師との対談形式で振り返りました。また、シンポジウムでは当事者、家族、支援者の視点から高知県での高次脳機能障害支援の現状や課題についてのディスカッションが行われました。

高次脳機能障害者支援は長期に渡る場合があり、地域での支援体制整備は年単位での取り組みが必要されます。短期目標(Short term)と長期目標(Long term)、ミクロ(当事者家族支援)からメゾ(地域支援)・マクロ(行政・政策への働きかけ)への展開や還元を意識した事業計画を立てることの必要性を再認しました。

(瀧澤 学)



(シンポジウムの様子)

## \*日本リハビリテーション工学協会福祉機器コンテスト2016 機器開発部門\*

# ★ 最優秀賞 受賞おめでとう ★

日本リハビリテーション工学協会福祉機器コンテスト2016の機器開発部門において、神奈川リハ病院リハ工学科のリハエンジニア松田健太さん、地域リハ支援センター地域支援室の作業療法士一木愛子さん二人で製作した自助具「“すらら”と“ぱっくん”」が、最優秀賞を受賞しました。

この作品は、3Dプリンタで作製した自助具で、本体とアタッチメントで構成されており、鉛筆やスプーンなどにアタッチメントを取付け、本体に差し込んで使用します。書字場面ではペンの把持を助けることで筆圧を向上させ、食事場面ではスプーンやフォークの把持を助けることで操作性を向上させることができます。

(※引用：一般社団法人日本リハビリテーション工学協会 福祉機器コンテスト2016 受賞作品ご紹介パンフレット)

今後も障がいを持つ方の生活支援を継続し、生活の質を高められるような自助具などを作製することを期待しています。

(泉 忠彦)



編集後記：10月は研修で忙しい日々でした。年末にかけてまたもう一踏ん張りです。“すらら”と“ぱっくん”の受賞はうれしいです。こうした取り組みなども通してリハビリテーションに今後も貢献したいと思えます。

ちょっと早いですが、よいお年を！ (泉 忠彦)

〒243-0121 神奈川県厚木市七沢 516  
神奈川県総合リハビリテーション事業団  
地域リハビリテーション支援センター  
TEL:046-249-2602 FAX:046-249-2601